# 「私と英語」

鈴木弘明

母に聞いたところによると、小学５年生になった頃、「英語の塾に行きたい」と言い出したのだそうだ。当時、山形県の鶴岡市に住んでいた。鶴岡といえば庄内藩の城下町である。質実剛健を旨とする庄内藩の気風が根強く残っている町であった。学習塾（といっても寺子屋風のものだったが）が盛んであった。その塾の一つに英語を教える塾があった。伊藤という先生が市内でも有名だった。その塾の評判を聞いて、子供なりに、英語ってどんなもんだろう？勉強してみたいな、と思ったのであろう。

それが英語との関わりの始まりだった。伊藤先生はそれはそれは厳しい、おっかない先生だった。出来が悪い生徒は、ほっぺをつねられたり、頭をゴツンとやられた。しかし、英語は面白いと思ったからだろうか、伊藤塾に行くのが楽しくもあった。

中学に入ってからも、伊藤塾で鍛えられたおかげだろう、英語は大好きな科目となった。ともかく良く声に出して教科書を読んだものだった。今はやりの音読である。何度も何度も声に出して読むからいつの間にか教科書の英文を完全に暗記することが出来た。試験になっても英文を丸暗記しているから、すぐに解答出来てしまう。時間が余ってしょうがなかった。英語の音に魅せられていたのかもしれない。中学の英語の教師、井上先生は発音をとても大事にする人だった。教室でもいつも声を出していた記憶がある。

高校に入ってから（高校一年の三学期からは仙台に住むようになっていた）も音読は続けていた。自分の英語の基礎を作ってくれたのはこの音読だろうと思う。音読の本、参考書が山ほど出版されているが、英語の基礎力をつけるのにもっとも確実で、効果的な手段ではないだろうか。

英文法にも興味を持ち始めた。言語のルール、規則がとても面白いと思ったのだ。国語、古文、漢文も好きだった。言語そのものが持つ力に魅せられていたのかもしれない。英文法の教科書も暗記してしまうほど良く読んだものだった。もっともこの頃ではその英文法に関する知識もずいぶんとおぼつかないものになってしまっているが。

大学に入学。工学部だったから英語の講座といっても教養課程で、やたらに難しい人文系の英語の本を読まされるだけ、それも週に一時限か二時限だった。いつの間にか英語が遠い存在になりかかってしまった。三年生になると英語の講座は全くなくなってしまったのである。さすがに気持ちが焦ってきた。このままでは好きな英語と付き合えなくなってしまう！そこで、英検を受験することにしたのである。まず二級を受ける。次いで一級。一次は合格したものの、二次は見事に落第。ヒアリングと面接での会話がからきしダメだったのだ。音読はやってきたわけだが、会話、人との
コミュニケーションということについては経験していなかったわけだ。悔しいから、仙台市内にあった英会話の学校に通った。この学校、楽しかった。楽しかったから勉強にも熱が入った。英検一級の二次に合格するだけのリスニング力、会話力をなんとかこの学校で身につけることが出来たのだった。

そして就職。音響の技術者として V 社に入社。「英検一級の資格を持っているんだから、これを訳してくれ」などと、論文の英訳などをやらされたりもしたが、まともに出来るわけもない。自分がこれまでに学んできた英語も、仕事において使うとなるとさっぱり役に立たない、ということを痛感せざるを得なかった。いつの間にか工業・技術に関する英語を勉強してみようかという気になったのである。

「工業英語」誌が創刊されたのが 75 年だったろうか。まさに待ちかねていた雑誌だった。一生懸命読んだ。すべての記事が

面白いと思った。全く知らなかった英語の世界を覗く思いがしたのである。

その「工業英語」誌に、工業英語の研究会の案内が出ていたのである。研究会は田町の機械工具会館で行われていた。いくつかあった研究会の一つに所属して勉強を始めたのだった。輪講形式で IBM 発行のコンピュータに関する英語の本を読み合わせたのだった。それこそ手探りで読んでいた。コンピュータのことなどさっぱりだったのだから。それでも技術に関連した英文を読みたい、という欲求に駆られて、一生懸命読んだものだった。

そして、77 年の秋のことである。この田町で行われていた研究会が母体となって、水上先生を講師として迎えて、工業英語研究会が発足したのである。

水上先生の最初の講義を受けた時の驚き、感動を忘れることはない。英語が好きだ、英語が得意だなどと思っていたことが恥ずかしく思えた。自分は、英語のほんの上っ面しか理解していなかったということを知らされたのである。言葉、言語の持つ深さを先生は教えてくれたのである。

工業英語研究会はその後、名称を技術英語研究会と変えるということはあったが、今も続けられている。月に一度、田町の会議室に集まって、議論しながら技術英語翻訳を学んでいるのである。水上先生は、いつも言っておられた、「翻訳者は一人で仕事をしていたらいけない。外に出て、いろんな人と交わり、いろんなことを見て、感じることが必要なのです」と。そのことを肝に銘じて皆が学んでいる。

仕事における英語との関わりという事で言えば、97 年の秋から、DVD の規格を策定するワーキング・グループの議長を務めるということになった。グループのメンバーは国内外の企業の人々。公用語は当然のことながら英語である。会議も、議事録などの文書もすべて英語である。自分に議長というような職務が勤まるだ

ろうかと不安な気持ちを抱きながらのスタートであった。

なにしろ否応なく英語を話さなければ会議が進まないのだ。遠慮している暇もなかった。しかし、根がずうずうしく出来ているのか、あるいは楽天的なのか、会議で英語を話すことにも慣れていったのである。会議で使用するプレゼン資料も今にして思えば驚くほどの分量を作成したのだった。そうこうするうちに海外の人達との交流がとても楽しくなっていったのである。アメリカに、英国に、台湾に、親友と呼べる友が出来ていったのである。今も、彼等とは交流が続いている。海外の友は、日本人とはまた違った考え方、見方を教えてくれる。英語は、彼らとのコミュニケーションにはどうしても欠かせないツールである。

英語を生涯の友として、勉強してきて本当に良かったと思う。翻訳という面での勉強をすることによって言語の素晴らしさを知ることが出来た。水上先生に教えを受けたことで言語と人間の関わりについて考えるようにもなった。そして仕事においてはコミュニケーションのツールとしての英語の重要性をまさに肌で知ることが出来たのである。

これからも、いや、人生最後の日まで、英語を学び続けようと思っているのである。

（東京技術英語研究会）